

池上寛編

『アジアにおける海上輸送と中韓台の港湾』

アジ研選書No.三五



コンテナ取扱量ランキングの上位を占めている。これが意味するのは、アジアで海上輸送が増加していること、港湾が整備されていることである。こうした認識の下、研究会を組織し、成果を取りまとめた。本書は序論のほか、二部構成でまとめている。第一部ではアジアの海上輸送に関する現状、第二部で中国、韓国、台湾の海上輸送や港湾に関する現状と課題をそれぞれ取り上げた。

近年のグローバルゼーションはヒト、モノ、カネの動きに大きく影響を与えている。モノの動きだけを見てみても、製造業企業が海外に進出し、国を越えた国際分業体制を整えて生産活動をするのが当たり前になっている。また、われわれの生活を見ても、多くのモノは外国から輸入されている。これらのモノも何らかの輸送手段によって運ばれている。

こうしたモノの動きを支えているのが国際物流である。国を跨る輸送手段には、空路、陸路、海路の三手段が考えられる。これらのなかで、もっとも利用される輸送手段は海上輸送である。その意味で国際物流を支えているといっても過言ではない。

その海上輸送に着目したのが、本書である。本書は二〇一一年／一二年度にアジア経済研究所で実施された「アジアにおける海上輸送と港湾」研究会の成果である。アジア地域では、中国の輸出の増加、アジア域内での国際分業の発展によって、アジアの港湾がコ

下、研究会を組織し、成果を取りまとめた。本書は序論のほか、二部構成でまとめている。第一部ではアジアの海上輸送に関する現状、第二部で中国、韓国、台湾の海上輸送や港湾に関する現状と課題をそれぞれ取り上げた。

序論 研究目的とその成果(池上寛)では、研究会の問題意識と先行研究と研究成果、そして得られた知見に述べるとともに、今後の課題を提示した。

第一章 アジアにおける海上輸送の現状分析(黒川久幸)では、世界の海上荷動きとその輸送をする船舶の規模を概観したうえで、海上コンテナ輸送について荷動き量やコンテナ船の就航状況を明らかにした。また、国・地域の港湾別コンテナ取扱量とコンテナ船の就航状況、鉄鉱石と原油の輸送状況についても取り上げている。

第二章 船社の東アジア域内での運

営戦略(春山利廣)では、筆者の経験を生かし、東アジアの荷動き量と日本の港を概観したうえで東アジア内のコンテナの配船パターン、運賃水準と運航コストを分析した。これらを踏まえ、船社の基本戦略を明らかにした。

第三章 中国北部主要港の発展過程と競合状況(小島末夫)では、中国の五大港湾群について概観しつつ、中国北部にある環渤海地区を周辺諸港や他地区の沿海港湾とも比較しながら検討した。また、この地区の特徴的な輸送方法である「海鉄聯運」方式と呼ばれる海上輸送と鉄道輸送の連携輸送方式も明らかにしている。

第四章 中国長江デルタ諸港の現況と課題(大西康雄)では、長江デルタ港湾群について検討した。ここに属する港湾の概要を検討しつつ、各港湾の総合評価と相互関係、長江デルタにある海運企業、外資系ターミナル・オペレーターの現況も取り上げている。

第五章 香港港の現状と香港系グローバル・ターミナル・オペレーターの戦略的展開(姜天勇)では、香港港周辺の珠江デルタの概況、香港港の現状を明らかにしている。また、グローバル・ターミナル・オペレーターと呼ばれる香港の港湾企業資本の戦略的展開を検討している。

第六章 北東アジアのハブ港をめぐる釜山港の戦略と現状(李貞和)では、韓国の釜山港を取り上げている。韓国の港湾政策と関係、釜山港の管理運営

の民営化、釜山港と後背地について検討している。

第七章 三通解禁以後の台湾と中国における海上輸送と港湾の変化(池上寛)では、二〇〇八年一月に解禁された中台間の海上輸送の直航解禁後にについて取り上げた。そのなかで、中台間の海上輸送の変化、台湾側のデータからみる中国との取扱貨物、台湾側の港湾の変化を検討している。

これらの章を読んで、アジアの海上輸送や北東アジアの港湾についていくつかの特徴が明らかになる。まず、北東アジアには輸出入貨物が中心の港湾と貨物の積替えのための港湾が混在していることである。次に、製造業企業を港湾近くに誘致する動きも引き続き行われている。さらに、コンテナターミナルの管理運営を民間に任せる動きがみられることである。

今後も海上輸送が国際物流の中心であることは変わらなく、引き続きアジア中心で海上輸送が行われることも疑いない。その意味で、今後もアジア地域では港湾の開発が続く、海上輸送がアジアの経済を支えるともいえる。アジアの海上輸送や北東アジアの港湾の状況について理解したい方には、ぜひ本書を一読していただきたい。

(いけがみ ひろし/アジア経済研究所 企業・産業研究グループ)